

あかるい日の歌～岸田衿子さんの詩～

一生おなじ歌を 歌い続けるのは

一生おなじ歌を 歌い続けるのは
だいじなことです むずかしいことです
あの季節がやってくるたびに
おなじ歌しかうたわない 鳥のように

『あかるい日の歌』

(岸田衿子著/青土社/1979年)より

なぜ 花はいつも

なぜ 花はいつも
こたえの形をしているのだろう
なぜ 問いばかり
空からふり注ぐのだろう

『あかるい日の歌』

(岸田衿子著/青土社/1979年)より

岸田衿子さんという詩人をご存知ですか。2011年に82歳でお亡くなりになりましたが、アニメ『アルプスの少女ハイジ』の主題歌「おしえて」や「まっててごらん」の作詞をされ、絵本『かばくん』や『ジोजオのかんむり』、『さいちごだより』(いずれも福音館書店)など多数の絵本で知られる童話作家でもあります。また、アーノルド・ローベルの『どろんこごぶた』(文化出版局)やジル・パークレムの『のぼらの村のものがたり』シリーズ(講談社)他、多くの児童文学の翻訳も手がけられました。詩人の谷川俊太郎さんとは幼なじみで、一時期ご結婚されていたこともあるそうです。

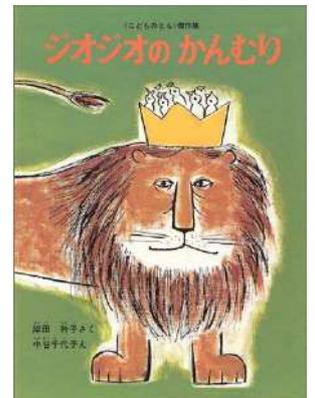
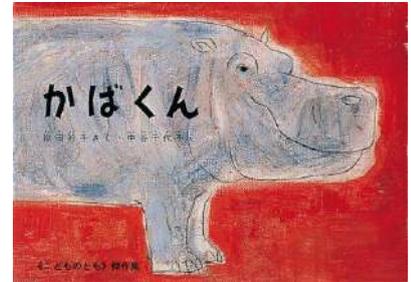
北軽井沢の山荘で暮らしながら、執筆活動をされました。『風にいろをつけたひとだれ』、『草色の切符を買って』(いずれも青土社)というエッセイ集、また、妹の岸田今日子さんとの共著『ふたりの山小屋だより』(文春文庫)から、そんな岸田さんが過ごされた豊かな自然の中での日々を想像してみることができます。

私が最初に手にとった岸田さんの作品は、『あかるい日の歌』(青土社/1979年)という詩集でした。安野光雅さんが装幀されたその美しい本は、地元の図書館で出会った当初、すでに絶版だったと記憶していますが、時を経ても古びることのない、どこかなつかしくみずみずしい音楽のような詩の数々にすっかり魅了されました。(そのためでしょうか、私にとって岸田衿子さんは、今でも第一に詩人です。)

例えば、「一生おなじ歌を 歌い続けるのは」、「なぜ 花はいつも」という四行詩を読んでもみると、昔も今もこれからも変わらないさえずりで命を受け継いでいく鳥たちや、そこに咲いているだけですでに完全な存在である花たちへの、感嘆や憧れ、敬愛、慈しみのこもったまなざしを感じられます。めぐってゆく季節や生きものたちの存在とそこへ心を寄せる人の生が、澄んだ静かなあかるさを持って立ち上がってくる…岸田さんの詩にはそういう魅力があります。秋に色づく柿の葉一枚とっても、自然界の美しさは人の手の到底及ばないものだと感じていた私ですが、そういうものを詩という形でとらえ、表現する岸田さんの言葉に、「人」が為しうるひとつの優れた芸術を感じたのでした。

その後何年かを経て母親になり、先にご紹介したような岸田さんの絵本や翻訳本を子どもと共にくりかえし読んだ日々は、楽しくてあたたかな優しい時間でした。岸田さんの手がけられた幅広く奥深い作品を知り、ユーモアや遊び心にも触れ、岸田さんが「子どものこころ」も「母のこころ」も持った方だったことを感じるようになりました。そんな今、『たいせつな一日』(理論社/2005年)という岸田さんの詩集の中に、胸にしみる詩があります。「竹とんぼに」という題で、この詩をよむと、私の中の「母のこころ」が共鳴するのでしょうか、いつも泣いてしまいそうになります。(岸田さんの詩は歌曲になっているものが多くあり、この詩からも、木下牧子さんという作曲家が美しい旋律とピアノで、素敵なお歌を作られています。興味のある方はぜひお聴きになってみてください。)詩は、時を越えて届く手紙のようなものなのかもしれません。

(秋の郵便配達司書)



竹とんぼに

なるべく 高く
なるべく 遠くって
いきかせたけれど
もし ほんとに
行ってしまったら どうしよう

とんぼより 飛行機よりも
空がすきになったら どうしよう
地平線をこえて
まひるの星に あいに行ったら
こっそり もどってきて

なるべく 高く
なるべく 遠く
でも ここをわすれないで

『たいせつな一日』

(岸田衿子著/理論社/2005年)より